



# 建築研究協会誌

Architectural Research Association

No.9

平成17年6月



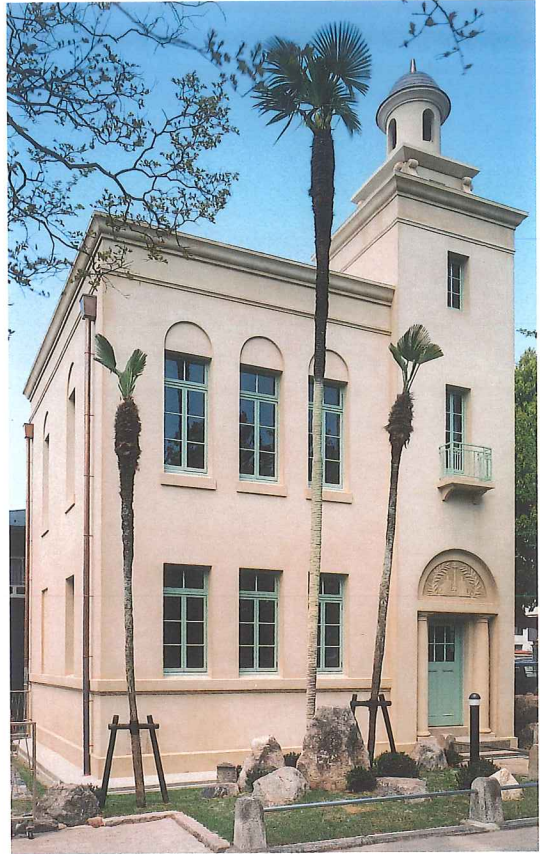


口絵1 泰平閣（橋殿） 南面



口絵2 大鳥居 南面





口絵3 東正面



口絵4 東北面夜景

旧水口図書館



## 巻頭言

# 国立大学の法人化について

評議員・京都大学副学長 辻 文三

平成16年4月より国立大学が法人化（国立大学法人という）され、それまでの文部科学省の一組織から、法人格を有するある意味で独立した組織に変化した。法人化されて1年余が経過したが、その間、多くの人から「法人化により大学がどう変わったのか？」という質問を受けた。国立大学法人の内容を一口で説明するのは難しいが、「巻頭言」を書く機会を与えられたので、京都大学を例にしながら、思いつくままに述べてみたい。最初に断っておきたいが、教育・研究の本質が国立大学法人になったからといって、変化するわけではない。（従来は研究・教育ということが多かったが、法人化後は必ず教育・研究とっている。）

まず、大学内の意志決定システムが変化した。規程上は総長に全ての権限が集中することになった。これまでの「評議会」にかわって、「教育研究評議会」で主として教学面に関する事項を、「経営協議会」（学外委員12名と学内委員12名で構成）で主として経営面に関する事項を審議することになった。重要な事項については、総長が任命する7名の理事（総長を補佐し業務を掌理する）で構成される「役員会」の議を経ることが義務づけられているが、最終的には総長が法人を代表して業務を総理することになっている。なお、京都大学では、法人化を機会に、これまで規程上の位置づけがなされていなかった「部局長会議」を、正式に学内規程に定義したことは他大学と異なる特徴である。このような形で総長が法人の長となる例は、独や仏にあるようであるが、そこでは経営の重要部分は政府の手にあり、このシステムは我が国独特のものと言われている。

二つ目は、大学運営上の自由度の拡大である。幾つかの例を述べてみる。①組織編成の自由度：学生定員を変えなければ、かなり自由に大学の意思で教育研究組織や、事務局の体制を換えることが可能になっている。また、時限施設の存廃も大学の判断に委ねられることになっている。②多様な収入に依存：国からは「施設費補助金」と「運営費交付金」が交付される。前者は用途が定まっているが、後者に「学生納付金」と「附属病院収入」

（何れも総長宛に納付）及び「雑収入」を加えた収入を「運営費交付金事業費」（概ね1000億円）と呼び、人件費や教育研究、病院経営に大学の裁量で自由に使用でき、次年度への繰越も理由があれば認められることになっている。しかし、毎年附属病院には経営改善係数（2%）に見合う増収が、教育研究経費には効率化係数（1%）に見合う経費削減が義務付けられており、その分、国からの交付金が自動的に減額される仕組みになっている。

また、法人化に伴って様々な費用が新たに必要になっていることから、競争的な教育研究経費を獲得しない限り、部局の予算は減少の一途を辿ることになっている。さらに、中期目標・中期計画（期間は6年）の終了後には、目標・計画の達成度による評価により、交付金が増減することになっている。近年、英国では研究評価を資金配分に反映させているが、サイクルを重ねるにつれて、矛盾が出てきているようであり、我が国がそのような轍を踏まない工夫が必要である。例えば、予算総枠が定まっているので、研究成果の評価が上昇した大学が増え、評価は上昇し、予算は減少するといったことが生じている。③教職員身分の非公務員化：教職員の身分が非公務員化され、労働条件は就業規則や労使協定等により定められることになった。また、人件費さえ準備すれば、大学の意志で様々な形の教職員の採用が可能になった。しかし、法人化される直前の定員ポストに就いている教職員にのみ退職金が国から措置されることから、年俸制を導入するか、独自に退職積立金を準備しない限り、それほど自由に人事制度設計ができる訳ではない。

三つ目は、6年間を単位とする大学活動に関する中期目標・中期計画の公表と、計画の実現度に対する評価である。目標は大学が原案を作成し、文部科学大臣が（大学の意見に配慮しながら）制定することになっている。大学はその目標に沿って計画を策定し、大臣の許可を得るというわけである。このことが、アカデミックフリーダムに抵触しないのかという疑問が残る。また、世界的に見ても、政府が目標を定め、管理するというような考え方は少ない。英国では大学に目標・計画を立てて運営を行うことを求めているが、すでに様々な問題がでてきている。

最近の、国の機関の独立行政法人への移行、建物の建設や管理におけるPFI方式の導入等と国立大学の法人化を併せて考えれば、英国のサッチャー首相の政策を、我が国が部分的に取り入れるようになったのではないかと思われる。我が国は「イギリス病」ならぬ「日本病」にかかっているのだろうか？



口絵

巻頭言 国立大学の法人化について

評議員・京都大学副学長 辻 文三 ..... 1

室長落亀利章さんを偲んで

主席研究員 平田文孝 ..... 5

平安神宮神苑の建築と大鳥居の修理工事について

主席研究員 藤本春樹／研究員 伊藤誠一郎 ..... 7

旧水口図書館保存修理工事について

主席研究員 平田文孝／研究員 鴨 昌和・野々部万美恵 ..... 17

研究報告・事業報告 ..... 29

名簿

編集後記



## 室長落亀利章さんを偲んで

主席研究員 平田文孝

例年、3月は年度末にあたることから、研究室の全員が仕事に追われ多忙な毎日過ごすことになる。この時期、片付ける仕事が多くなっていた落亀さんは、誰もが判るぐらい顔色が悪く、本人も普段と違う身体の不調に気が付かれたのか平成14年4月1日病院に駆けつけたが、そのまま2ヶ月半の入院生活となった。退院後は、顔色も普段と変わらないまでになり、勤務に復帰できたと思われたが、いま一つ身体の調子が思わしくなく再び入院、以後身体の様子を窺いながら養生を行ってきた平成17年2月21日帰らぬ人となった。

還暦と言う節目を迎えたばかりで、享年61歳、あまりにも早い他界となったことが残念であり、またご本人もやり残した仕事を果たせなかった無念の思いでいっぱいであったであろうと思う。

落亀さんは、昭和37年香川県立坂出工校卒業と同時に、京都大学工学部建築学教室内に設立された(財)建築研究協会・棚橋研究室に所属し、建築構造分野の研究を主に設計、現場監理などの仕事に携わってこられた。

殊に、木造建築に大変な興味をもっており、初めて木造を手掛けた西芳寺(別称苔寺)三重塔(新築)の構造について、構造計算で風荷重を検討すると塔は倒れるのだが、実際は倒れもしないでよく建っている、未だ構造上解明されていないものがあるのではないかと口癖のように話しをされていた。また、構造分野の視点から歴史的建造物の修理或いは復元と言う仕事に携わってこられ、氏の業績の中で代表的なものとして、奈良県法起寺三重塔修理(昭和48年)、平城京跡朱雀門復元(昭和62年)、薬師寺大講堂復元(平成4年)等を掲げることができ、木造建築における構造補強とその復元に係る構造の提案が行われてきたが、木造建築に対する熱意は並々ならないものがあり、周りの人達を圧倒させてきた。



更に、鳥取県若桜町吉川小学校体育館新築工場の現場(昭和40年)では、地元民家で下宿住まいをしながら、冬の山間地と言う地理的条件のなか、降積もった雪の山道を1時間掛けて現場に通い監理をされていたことも、当時研究室の先輩諸氏から苦勞話の一つとして聞いていた。

一方、昭和45年頃から大森健二先生を中心に日本建築研究室では、消防設備など防災部門の研究が進められており、落亀さんもスタッフの一員として加わることになり、今日まで

の約35年間、防災に関する計画・設計並びに施工技術の発展に力を注いでこられ、同時に数多くの業績を残された。その代表例として、比叡山延暦寺総合防災施設（昭和59年～平成2年）、東大寺境内総合防災施設（平成元年～10年）、国宝・姫路城総合防災（平成9年～14年）等を掲げることができ、何れも国宝・重要文化財指定或いは世界遺産に登録された建造物などを対象としたものであった。また、全国に先駆けて総合防災システムと言った方式を誰よりもいち早く取り入れ、施設とその周辺のものも含めて如何に火災からこれらを守り、そして被害を最小限に止めるか等について技術的提案を示し、これまで事例がない総合的防災システムを実現させたことは、氏が手掛けた実施設計を通して、現在の防災設備の在り方を示すと同時に、更なる防災システムの研究をすすめ、将来における防災設備の在り方について新たな提案を求めたものと思う。

落亀さんは、常に先進的な考えをもちつづけてこられ、建築構造、建築防災と言った分野の設計計画に当たっては、その主軸となる要因を見つけ出す過程を重要視しており、これを計画のアイデアとして設計を全体的にまとめることで、他のものより一歩進んだ設計の表現が行われてきた。日々、あまり事の多くを語ろうとせず、黙として仕事をしていた落亀さんの姿が研究室にあったが、これからはその姿を見ることができない。

心よりご冥福を祈っております。

# 平安神宮神苑の建築と大鳥居の修理工事について

主席研究員 藤本春樹／研究員 伊藤誠一郎

はじめに

平安神宮は京都市左京区岡崎に所在し、明治28年（1895）3月、平安遷都1100年祭を記念して創建された。平安神宮の御祭神は桓武天皇並びに孝明天皇で、桓武天皇は創建時に奉祀され、孝明天皇は昭和15年（1940）に合祀された。また、京都の三大祭の一つでもある時代祭は、毎年10月22日に執り行われている。

平安神宮では、桓武天皇1200年の大祭を平成17年（2005）に迎えるにあたり、さまざまな記念事業が計画された。そのうち文化遺産の修理保全事業として、神苑内の尚美館（貴賓館）と泰平閣（橋殿）の檜皮屋根葺替工事、大鳥居塗装並びに鍔金物鍍金工事、内拝殿と大極殿の基壇、高欄改修工事、龍尾壇高欄塗り替え工事等が行われており、今回は、尚美館と泰平閣の檜皮葺替工事、大鳥居の修理工事についての報告とする。

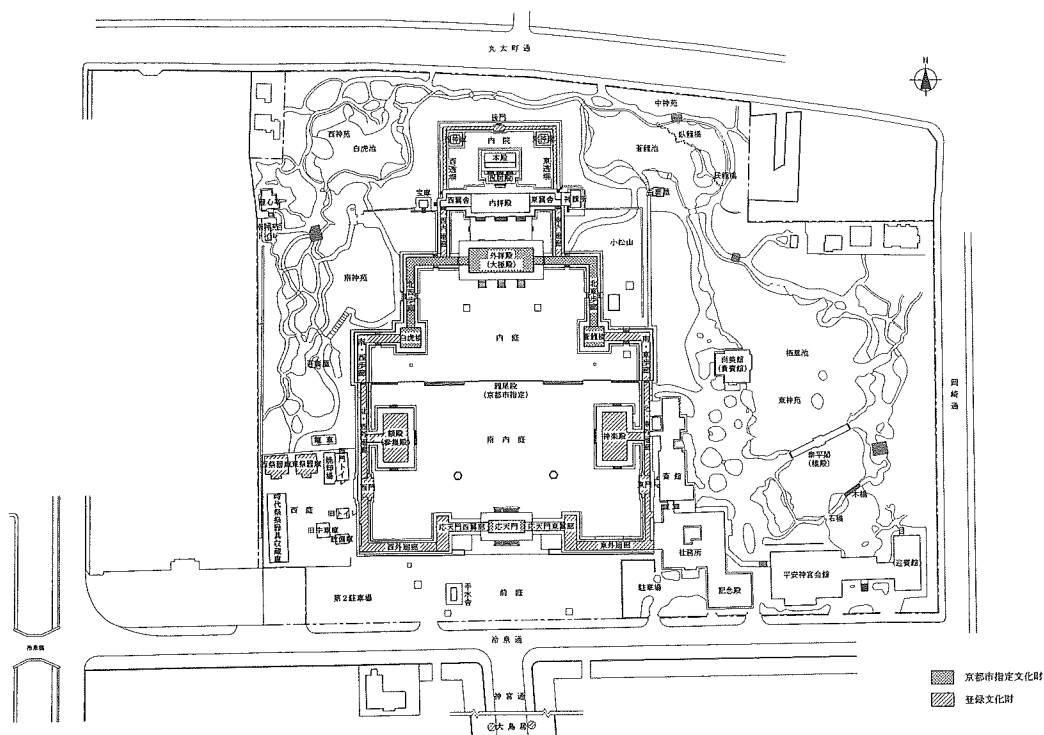


図-1 平安神宮境内配置図

## 1. 平安神宮の沿革

平安神宮の境内は、冷泉通りの北側に位置し、北は丸太町通り、東は岡崎通りに面している。敷地面積約7万平方メートルを有し、正面の応天門を入ると外拝殿（大極殿）、内拝殿、祝詞殿、本殿が南から北へ一直線に並び、応天門から外拝殿にかけては上下二段に白砂が敷かれ、上段に龍尾壇が設けられおり、外拝殿の正面には左近桜、右近橘が植えられている。外拝殿の南東には蒼龍楼、南西には白虎楼が建ち、それぞれ歩廊で外拝殿に繋がっている。また、応天門と両楼を繋ぐ廻廊が東西に廻らされ、東廻廊、西廻廊と呼ばれている。東廻廊には神楽殿、西廻廊には額殿が接続している。内拝殿の東側には神饌所、西側には宝庫が建ち、本殿の周囲を透塀で囲み、北東、北西隅には東、西神庫が建てられており、東廻廊の東側には社務所、記念殿、会館が建ち並び、西廻廊の西側には時代祭の祭器具を収蔵する収蔵庫が建てられている。

平安神宮の創建は、明治28年（1895）に行われた平安遷都1100年記念祭の計画のなかで模造大極殿を建て、これを記念祭のモニュメントとしたことから始まる。当初の計画は、平安京創建時の朝堂院の復原であったが、敷地等の制約から規模を縮小し、大極殿、蒼龍楼、白虎楼とそれらを繋ぐ歩廊並びに応天門が建てられた。その後、大極殿北側に桓武天皇を奉斎する本殿を建て、大極殿を拝殿とすることとなった。

昭和15年（1940）には孝明天皇合祀に伴い、本殿の建て直しを主とした境内整備が行われ、今まで一棟だった本殿を東西に並べ、東本殿には桓武天皇、西本殿には孝明天皇が奉祀された。また、大極殿と本殿の間に新たに拝殿を建て内拝殿とし、大極殿は外拝殿と改められた。その他に東西神庫、透塀、宝庫、神饌所、神楽殿、額殿、東西廻廊、斎館、社務所、祭器庫等の建物が新築され、既存建物の修理、庭園の整備、表参道の拡幅等が行われ、現在の平安神宮の社頭が形成された。

その後、各建物は記念祭及び大祭で部分的な修理は行われてきたが、創建以来80年近く経過し、昭和50年（1975）の御鎮座80年祭を機に3年計画で本殿以下諸建物の修理事業が計画された。しかし、昭和51年（1976）1月6日の不慮の出火により、東西本殿、内拝殿、祝詞殿、東西翼舎、宝庫、神饌所の建物は全焼した。そのため、社殿修復事業は社殿復興事業に改められ、三間社の二棟の本殿は、合の間を入れて七間という一棟の本殿に変更し、また他の焼失した建物も新築し、既存建物は修理が行われた。特に御本殿が火災で焼失したということから防火対策が見直され、すべての建物に自動火災報知設備が設置された。昭和54年（1979）2月末に全ての工事が完成し、翌3月15日に本殿の遷座が行われた。

平安神宮の創建時に建てられた大極殿、蒼龍楼、白虎楼、東西歩廊、応天門は昭和58年（1983）6月1日に京都市指定文化財に指定され、昭和15年に建てられた大鳥居、神楽殿、

額殿、南歩廊等の建物は、平成14年（2002）8月21日に登録文化財に登録された。

## 2. 尚美館と泰平閣の修理

尚美館と泰平閣は東神苑内に位置し、尚美館は栖鳳池せいほう池の西岸に面して建ち、泰平閣は池の中央を東西にまたぎ、楼閣を中心にしてその両翼に翼楼を左右対称にして建っており、尚美館は貴賓殿、泰平閣は橋殿とも呼ばれている。これらの建物は、近年屋根の傷みが進み、雨漏りが各所でみられ、早急に修理を要する状態であった。そのため、桓武天皇1200年の記念事業の第一期事業として、平成12年度より4ヵ年事業で屋根の葺き替えを主とした修理工事を行った。



写真-1 尚美館 正側面

## 神苑の概要

神苑は、約3万平方メートルを有し、西神苑、中神苑、東神苑、南神苑の四つの庭で構成されている。それぞれの庭には、平安京大内裏の朝堂院四楼にちなんで、西神苑には白虎池、中神苑には蒼龍池、東神苑には栖鳳池が造られている。西神苑の白虎池には島がなく、花菖蒲が池畔を覆い、池の北には神苑唯一の滝がある。中神苑の蒼龍池には、池の中の東寄りに大島があり、島の北側に三条・五条大橋の石柱を利用した臥龍橋が架けられ、神苑の名所のひとつになっている。東神苑は壮大な栖鳳池中心とした庭園で、池の周囲に苑路を廻らせ、随所に枝垂れ桜を植え、池中に泰平閣、寝殿造りの釣殿風の尚美館が池の西岸に望んで建てられており、ここから東山の山々が眺められる。これらの建物は、栖鳳池と一体となって庭園景観を形成する一要素になっている。

各苑は有機的に連絡し、近代回遊式庭園として大規模なものであり、また建築物と庭園が良く調和し、近代庭園を代表するもののひとつになっている。

神苑の創建は、明治28年（1895）に模造大極殿が造営されるにあたり、社殿一帯の風致保存のために、周囲に庭園が計画されたことに始まる。その当時、本殿の東側に蒼龍池、西側に白虎池が設けられ、これを中心に庭園が造られた。この時、神苑の作庭には小川治兵衛があたり、その後昭和の初期までの約30年の間、常に彼の手法が受け継がれ、神苑の

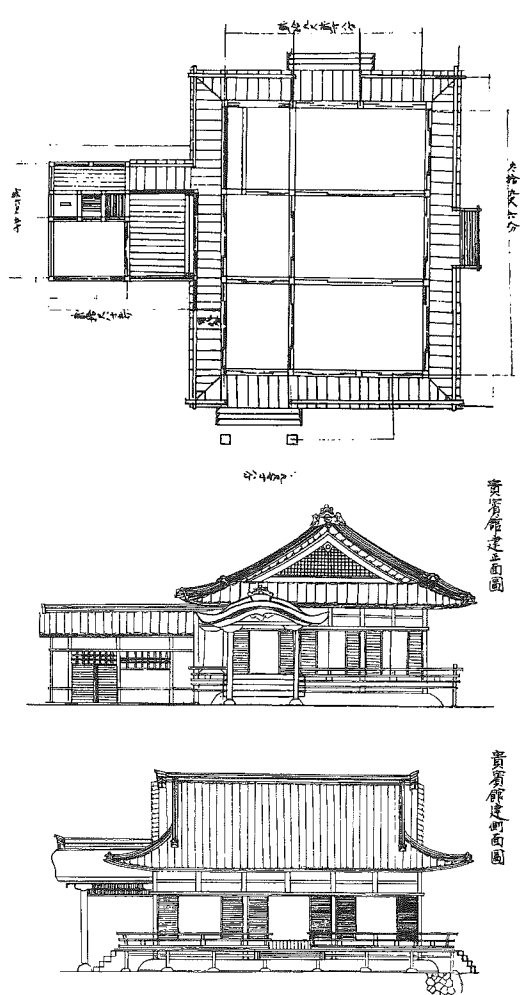


図-2 尚美館 平面図、正面図、東側面図（大正3年）

### 尚美館の概要

尚美館は、明治13年（1880）に仙洞御所<sup>せんどう</sup>の庭園内に旧京都博覧会の中堂として建てられていた正面六間、奥行き四間半の建物を大正2年（1913）に現在の場所に移築、改築したものである。安田時秀技師が改築設計を行い、貴賓館とされた。移築当初は棧瓦葺であったが、昭和15年（1940）、孝明天皇奉祀の記念事業で檜皮葺に改められ、東側面の縁の張り出しや西側下屋の改築が行われたと思われる。

また、昭和51年（1976）の檜皮の葺き替え時には、東面の軒の出を深くするため、一部を縄破風として屋根を葺き下ろす改修が行われている。

現在の建物は、入母屋造、南面西寄りに唐破風屋根の車寄せを付け、西面に片流れの下

築造や増改築が行われた。

明治の終わりから大正の初めにかけて、旧京都市美術館の敷地跡が平安神宮境内地に編入され、その場所に東神苑が造られることとなり。尚美館、泰平閣は、この時に移築及び新築された。

昭和43年（1968）、孝明天皇100年祭を記念して神苑西側の整備が行われ、南神苑を新たに築造する計画がたてられ、作庭には中根金作が担当し、工事は昭和44年（1969）11月20日に竣工した。南神苑は全体的に平安王朝風の優雅な風情をもつ曲水の庭が想定され、その後、南神苑は平安時代の草花が植えられ「平安の苑」として昭和56年（1981）に開園した。

神苑は昭和50年（1975）12月10日に国の名勝に指定されている。



屋を設けている。平面は、南を正面とし、正面西寄りに車寄せが付き、本屋は、正面から背面にかけて三間に間仕切り、東側に12帖間を三室並べ、西側の背面寄りに二間幅の床の間付きの4帖の上段の間を構え、その南側に二室の6帖間を配している。外周は、切目縁を廻らし、外廻りに高欄を付け、また、西面の縁外には、流し、広敷、便所等の付属施設を下屋としている。柱礎石、地覆石は、花崗岩の切石を据え、縁束石には花崗岩の自然石、切石が使われている。本屋の軸部は、礎石上に柱を建て、地覆、足固めを廻らし、内法貫、化粧貫を通し、外周は内法長押、内周は内法長押と天井長押を廻らし、柱頂部に舟肘木を置き、軒桁を載せている。車寄せの軸部は、礎石上に大面取りの柱を建て、頭貫を三方に通し、柱頂部に舟肘木を置き、正面には繫虹梁、側面には軒桁を載せている。正面の頭貫と繫虹梁間には蓐股を置き、繫虹梁上に笈形付きの太瓶束を建て、大斗を置き、化粧棟木を受けている。本屋の軒廻りは、二軒疎垂木で、木負、茅負、布裏甲を載せ、化粧裏板を縦張りとしている。車寄せの軒廻りも同様で、桁内は茨垂木を架け、化粧小舞を置き、縦張りに化粧裏板を張っている。本屋の屋根は、檜皮葺き、裏板の一重軒付けで、棟は瓦積みで葺瓦、肌熨斗二段、熨斗瓦五段を積み、伏間瓦を置き、両端に鱗付きの獅子口を据えている。車寄せの屋根は、檜皮葺き、裏板の一重軒付けで、正面に唐破風を設け、棟は本屋と同じく瓦積みで正面に鱗付きの獅子口を据えている。

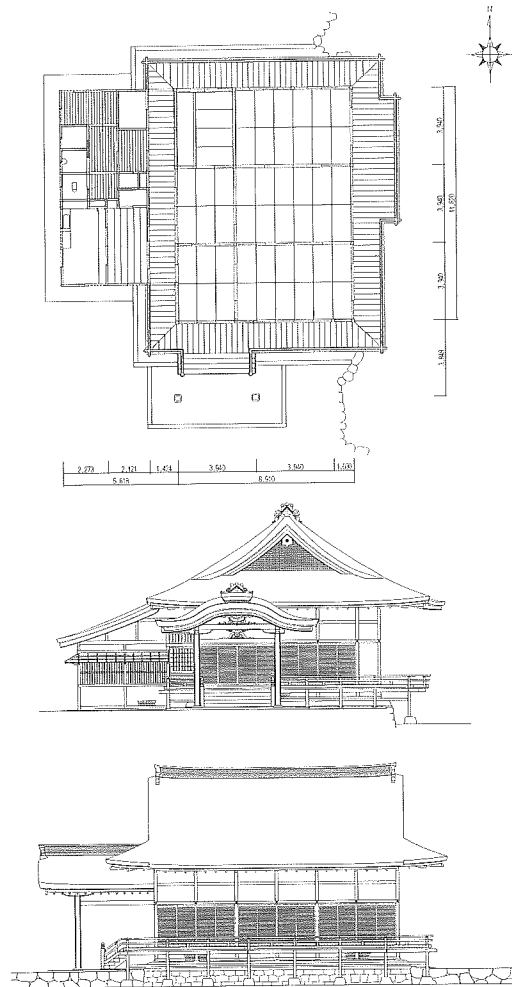


図-3 尚美館 平面図、正面図、東側面図

## 泰平閣の概要

泰平閣は、明治45年（1912）7月27日には池の上の架橋がほぼ完成していたが、その後の建築については詳細が明らかでなかった。今回の屋根葺替工事によって、楼閣上層屋根の露盤から銘文が発見され、大正元年（1912）12月1日に東神苑の修築が行われたことが判明した。また、設計は、工事監理に安田時秀の名前がみえることから、「社務日記」明治44年（1911）9月4日、5日の条の内容を裏付けるもので、尚美館の改築設計を担当した安田技師に間違いのないものと思われる。

建物は、中央に重層の楼閣を置き、東西に桁行五間、梁間一間の翼楼を設けており、南北の両側には、張り出しの高欄付腰掛が付いている。基礎は、池中に花崗岩切石の柱脚を建て、兩岸に花崗岩切石を積み、下桁を東西方向に架け渡している。軸部は、楼閣下層が下桁上に地覆を据え付け、柱を建て、外周に内法長押を廻し、柱頂部に片蓋式の舟肘木を付けて軒桁を載せており、楼閣上層は、外周に地長押、内法長押を付け、柱頂部に舟肘木を置き、軒桁を載せている。翼楼軸部は、楼閣下層同様に地覆を据え付け、桁行方向の柱通りに内法貫を通し、柱頂部に軒桁を載せ、梁間方向には、内法貫上に絵様肘木を内外に

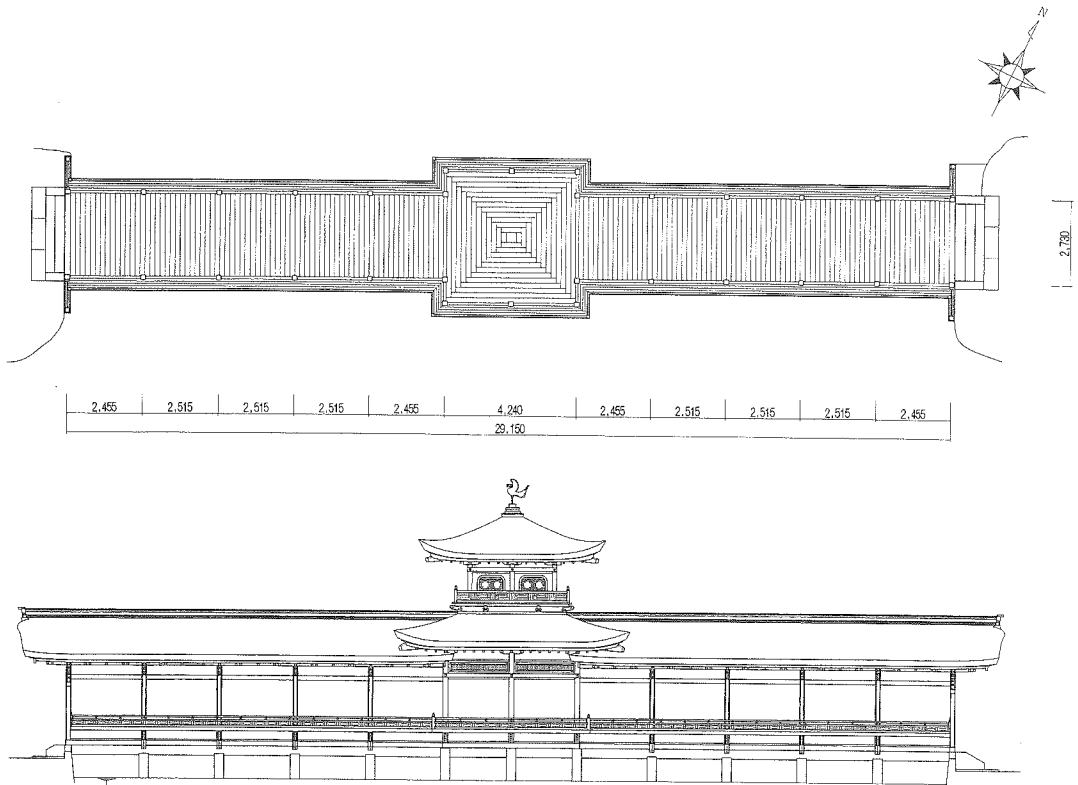


図-4 泰平閣 平面図、南立面図

設けて巻斗を置き、腕木を載せて外は軒桁、内は皿斗を置き虹梁を架け渡し、出桁を載せ、虹梁上の太瓶束、大斗で化粧棟木を受けている。軒廻りは、楼閣は下層、上層とも一軒疎垂木で、茅負、布裏甲を載せ、縦張りの化粧裏板を張っている。翼楼も一軒疎垂木で、広小舞、布裏甲を載せ、化粧小舞を置き、化粧裏板を縦張りとしている。屋根は、楼閣が檜皮葺、蛇腹板の一重軒付で、上層は露盤を置き、鳳凰を載っている。翼楼の屋根も檜皮葺、蛇腹板の一重軒付で、東西の両妻に唐破風を設けており、棟は瓦積みで、肌熨斗二段、菊丸一段、雨熨斗二段を積み雁振瓦を置き、両端に鱧付きの獅子口を据えている。

### 修理工事の概要

尚美館は昭和51年（1976）、泰平閣は昭和50年にそれぞれ屋根の檜皮の葺き替えが行われたが、平成9年（1997）10月の台風7号によって屋根の檜皮葺が被害を受け、応急的な修理が行われたものの、近年屋根の痛みが目立ち、雨漏りが随所に見られる等、早急に屋根の修理を行う必要があった。

そのため、尚美館と泰平閣は、桓武天皇1200年大祭記念事業の第一期事業の一事業として屋根の葺き替えを主とした部分修理工事が計画され、総事業費2億2,124万3,870円、国宝重要文化財等保存整備費補助金を受けて、事業期間が平成13年（2001）1月5日から平成16年（2004）3月31日までの39ヶ月間、工事期間が平成13年2月14日から平成16年2月20日までの36ヶ月間で実施された。

4ヵ年事業で行われた工事は、初年度の平成12年度には、泰平閣に素屋根を架設し、檜皮材料の調達を行い、平成13年度には、泰平閣の屋根の解体を行い、小屋組の補修、屋根の葺き替え、棟の瓦積みを行った後、素屋根を撤去し、尚美館の素屋根の架設に着手した。平成14年度には、前年度に引き続き尚美館の素屋根の架設、檜皮材料の調達、屋根の解体、小屋組の補修、屋根の葺き替えの一部を行い、その他には、既設ドレンチャー設備の撤去、庇の修理も実施した。平成15年度には、前年度に引き続き、尚美館の屋根の葺き替え、棟の瓦積み、避雷設備の据え付け直しを行ない、屋根工事が完了した後素屋根を撤去した。また消火設備は、地下式放水銃を新たに設置した。

尚美館の屋根は、軒付けの一部を残し、檜皮葺きを解体した後、野地面の腐朽箇所を取り替えを行ない、檜皮を葺き直した。屋根面に取り付けられていたドレンチャー設備は、昭和51年（1976）に設置されたものであったが、その周囲の檜皮が著しく損傷していたため、ヘッドや配管を撤去し、新たに放水銃二基を設置した。

泰平閣の屋根は、全面に痛みがひどく、軒先の一部が陥没するなど損傷が甚だしいため、全面的に檜皮の葺き直しを行った。

### 3. 大鳥居の修理

大鳥居は、応天門から南へ約300mの神宮道に位置する鉄筋コンクリート造一部鉄骨造鉄網モルタル塗の明神型の鳥居である。総高さ24.42m、柱間18.18mで、創建当時は全国最大規模を誇る大鳥居で、平安神宮の景観にはかかせない象徴的な役割をはたしてきた。

#### 大鳥居の概要

大鳥居の柱は、円筒形中空鉄筋コンクリート造で柱脚元には花崗岩を張り、豆砂利洗い出しの犬走りを設け、周囲に花崗岩の縁石を廻らし、柱頂部に金箔押しの鍔金具を廻らしている。貫、額束、島木、笠木は等辺山形鋼をトラスに組み、その上に鉄網を張り、モルタルが塗られている。貫、島木、笠木の木口には金箔押しの鍔金物が付き、島木の両側面に菊の鍔金物が各三箇所取り付けられている。修理前の屋根には、波型スレートが葺かれていたが、記録や古写真によると貫等と同様に屋根下地の鉄骨に鉄網を張り、モルタルを塗り、石綿板が葺かれていたことが今回の工事中に判った。

平安神宮は、創建以来30年以上鳥居のない神社として経過してきたが、昭和3年(1928)に昭和天皇御大礼の記念事業として大鳥居の建設が計画され、平安神宮や時代祭を維持する京都市民が組織する平安講社によって建てられた。この工事の顧問には、京都帝国大学

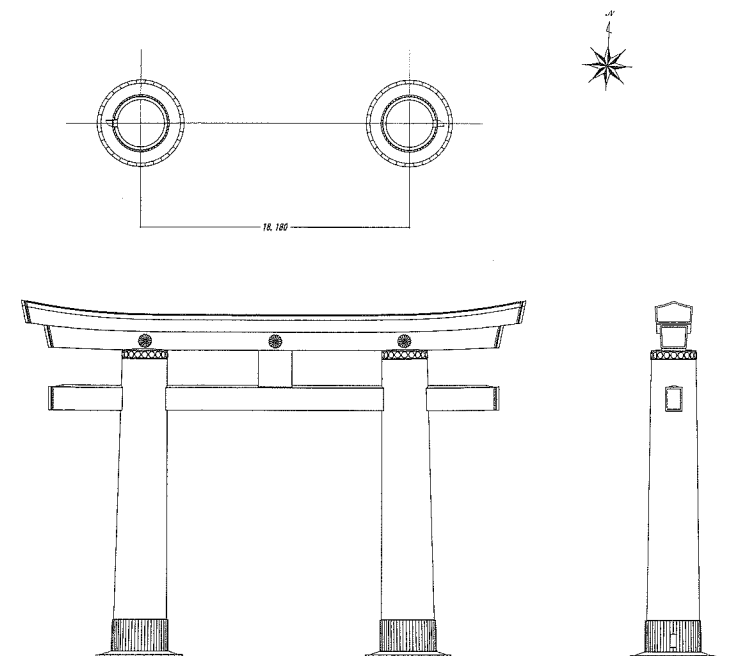


図-5 大鳥居 平面図、正面図、側面図

武田五一教授、設計並びに工事監督には阪谷良之進技師、構造設計には京都帝国大学坂静雄助教授が担当した。建設位置については、二箇所検討され、現在の位置と神宮道の二条通りより北へ十間の位置が候補地に上がり、神社全体の規模、応天門と大極殿との距離、道路並びに慶流橋との関係が考慮され、現在の場所に建

てられることになった。鳥居の様式規模については、当時の當山亮道宮司みずからが全国各地の100余りの鳥居を視察し、構造、高さ、幅等の調査を行い、衆議にはかった結果、明神型の鳥居に決定された。阪谷技師が基本設計を行い、約1/50の木製の模型が製作され、平安神宮関係者の意見をもとに実施設計が完成した。

鳥居の建立工事は、昭和3年（1928）6月1日から10月6日までに建築工事が行われ、その後約5ヵ月間にわたり表面のモルタル塗りの乾燥期間を置き、翌年3月に塗装工事が完了した。

その後、雨漏り、塗装の褪色が目立ち、昭和35年（1960）、孝明天皇御鎮座20年記念大祭の一事業として屋根改修と塗装の塗り替えを主とした修繕工事が行われた。翌年、9月の台風18号によって、前年の修理工事で新たに銅板葺きに葺き替えられた屋根が被害を受け、その時波型スレートに葺き替えられた。その後、昭和53年（1978）に塗装の塗り替え、モルタル塗りの補修、構造補強の修繕工事が実施された。この工事は当初、平安神宮御鎮座80年祭の記念事業の一部として昭和52年に実施される予定であったが、昭和51年（1976）1月の本殿等の建物が焼失したことから、この事業全体の見直しが図られ、1年遅れで実施された。



写真-2 大鳥居笠木屋根内部

しかしながら近年、鳥居表面に塗られている塗料の劣化が進み、モルタル塗りに亀裂が目立ってきたため、平成11年（1999）8月に現状調査が実施された。調査の結果、剥落したモルタル片が鳥居下を通る道路や歩道に落下する恐れがあることが判明、早急に修理を行う状況にあった。

#### 修理工事の概要

大鳥居の修理工事は、桓武天皇1200年大祭記念事業の第二期事業の一事業として、塗装の塗り替えを主とした保存修理工事として計画され、総事業費8,568万円で、国宝重要文化財等保存整備費補助金を受け、事業期間が平成15年（2003）12月1日から平成16年

(2004) 3月31日までの16ヶ月、工事期間が平成16年5月24日から同年10月14日までの約5ヶ月で実施された。

修理工事では、鉄筋コンクリート造の柱の亀裂箇所にはエポキシ樹脂を注入し、フッ素樹脂塗装を行った。また、鉄骨造モルタル塗りの貫、額束、島木及び笠木は、表面の亀裂補修を行い、全面に炭素繊維シートを張り、その上にフッ素樹脂塗料を塗った。柱脚元の袴石は、割れや雨水の浸入により汚れが目立っていたために全て取り外し、清掃、補修及び一部取り替えを行った。取り付け方法は、在来に倣いモルタル詰めを行い、新たにステンレスの金物を用いた併用工法とした。笠木屋根は、昭和36年(1961)の台風の被害の後、応急的に葺かれた波型スレートを撤去し、硬質木片セメント板を張り、モルタル面と同様に炭素繊維シートを張り、フッ素樹脂塗料を塗った。木口等に取り付いている銕金物は、昭和35年(1960)の修理工事以来、44年ぶりに金箔を押し直し、表面保護のためにフッ素樹脂クリアを塗った。内部は、鉄骨の腐食が著しい箇所には補強の鉄骨を取り付け、鉄骨面全てに錆止め塗料を塗り、コンクリート、モルタル面には表面劣化防止剤を塗布した。また、今回の工事では、笠木上に避雷設備を新たに設置した。

#### あとがき

尚美館、泰平閣は約30年ぶりに檜皮葺の屋根が葺替えられ、東神苑の景観を構成する二つの建築物が整備された。また大鳥居は、炭素繊維シートによるモルタル面の補強を行うなど創建以来、初めてとなる大掛かりな修理工事で、鳥居全体にフッ素樹脂塗料が塗られ、鮮やかな朱色と銕金物の金色の輝きが甦った。

今回の修理工事により、これらが今後も京都市民のシンボルとして、また貴重な文化遺産としてあり続けることを期待してやまない。

終わりに、修理工事にあたり、工事関係者をはじめその他多大な協力をいただいた関係各位に対して心から感謝を申し上げます。

引用・参考文献 『平安神宮百年史』平安神宮(1998)

『平安神宮大鳥居造営史』平安講社本部(1929)

『名勝 平安神宮神苑記念物尚美館(貴賓殿)泰平閣(橋殿)保存修理工事報告書』

平安神宮(2004)

『国登録有形文化財(建造物) 平安神宮大鳥居保存修理工事報告書』平安神宮(2005)

写真協力 巻頭写真 株式会社 エスエス大阪

# 旧水口図書館保存修理工事について

主席研究員 平田文孝／研究員 鴨 昌和・野々部万美恵

## 概 況

水口町は滋賀県最南部の甲賀郡7町のひとつで、本事業完了後の平成16年（2004）10月に甲賀郡の5町（水口町、甲賀町、甲西町、土山町、石部町）が合併し市制が敷かれた。甲賀市域の南方が三重県に接する地理的条件から、水口町は古くから伊勢神宮参宮の街道筋にあたり、中世に入り大岡山に築城されるが関ヶ原合戦で落城した。その後、慶長期には東海道の宿駅に指定され経済的な発展を遂げ、寛永期には将軍家御茶屋御殿として水口城が築かれ、城下町としての賑わいがみられるようになり、以降甲賀地域の中心的存在として位置付けられてきた。

今回報告する旧図書館は、水口城外濠にあたる水口小学校の校門脇に建っている。水口小学校における図書館の歴史は、水口尋常小学校時代の明治42年（1909）に始まる。卒業生が図書館の必要性を提案したのが動機となり、町内や巖谷小波<sup>1)</sup>をはじめとする有縁の人々の寄贈図書、委託図書によって開館した。小学校校門の東に3坪の独立書庫、西の校舎の一部を県下初の開架式閲覧室に改造したもので、小学校附設の町立図書館として社会と学校教育の両面に貢献する機能を有していた。またこの図書館には子守文庫も併設されており、子守に雇われた未就学児童をはじめ様々な人達が教養を高める場所となるように腐心したことが窺える。その後、全国的に学校が独立の図書室を設けるようになり、水口小学校においても例外ではなかった。同時期に水口町出身の実業家井上好三郎氏から図書館改築の寄付を受けることになり、同じ小学校の一角に学校図書館としてではなく地域の町立図書館として建設するに至った。そして昭和3年（1928）、建設費用11,000円をかけて完成したのが、現在の旧図書館の建物である。

設計は、当時近江八幡を中心に活躍をしていたヴォーリス建築事務所<sup>2)</sup>で



写真-1 着工前の旧図書館正面

あった。ヴォーリスの設計した旧図書館は、当時の水口町では相当に斬新な建物であったと伝えられ、それだけに地域の多くの人々がこのモダンでハイカラな建物の誇りや愛着を感じてきたようである。図書館は、当初1階が児童を対象とした閲覧室、2階は一般者向けの閲覧室兼会議室としており、屋上にはベンチが置かれて憩いの場になっていた。

しかし年々蔵書が増加し手狭になり、昭和45年（1970）図書館を別の場所に新たに設け、以後、旧図書館は水口教科書センターと改称され、過去の教科書保管収集閲覧や校舎に使われていた古い瓦等の資料保管の場所として利用されてきた。これまでのように毎日人が訪れることもなく放置に近い状態になった建物は、昭和50年（1975）頃、塔屋の上部を飾っていたランタンが維持できなくなり解体撤去した。同時期、雨漏りが酷くなった屋上防水や外装の塗り壁の補修工事を行ったが、部分的な修理で済む状況ではなくなっており全体的な老朽化が加速していった。

注1 いかわ さぎなみ 水口藩出身の官僚で書家の巖谷一六の三男として東京で生まれる。小説家としてデビュー後、日本における児童文学の創始者として活躍した。主な作品には「こがね丸」のほか、「日本昔噺」や「世界お伽噺」などでは伝承されてきた物語に手を加え子供が親しみやすいものに工夫した。現代においても、一般に子供時代に馴染み親しむ桃太郎などの昔話のほとんどは巖谷小波の再話が元になっているとされる。水口小学校には明治41年（1908）に御伽噺講演会のため来校し、その2年後に校歌の作詞をするなど浅からぬ縁があり、また水口町にとっては親しみ深い郷土の誇りといえる。

注2 ヴォーリス建築事務所 ウィリアム・メレル・ヴォーリス（1880～1964）が開設した設計事務所。ヴォーリスは、明治38年（1905）アメリカから滋賀県商業学校（現八幡商業高校）の英語教師として来日した。その後も亡くなるまで近江八幡に留まり、建築設計（ヴォーリス建築事務所）や医薬品販売（近江兄弟社）を経済活動の中心としながら、キリスト教伝道活動のほか教育（後の近江兄弟社学園）や社会事業など幅広く活躍した。戦中に帰化し一柳米来留ひとつやなぎめいれと名乗り、のちに近江八幡名誉市民第一号となった。旧図書館を設計した昭和初期は、戦前期ヴォーリス建築の最盛期にあたり珠玉の作品のひとつと高く評価されている。水口には彼の作品として水口協会もある。

## 事業の経緯

近年、ヴォーリス建築全般が社会的に注目されるようになり、水口町においても老朽化が著しくなっていた旧図書館の保存を望む声が高まりつつあった。そうした住民の意識の変化を汲み取った水口町は、「水口町総合計画」のひとつとして旧図書館の保存をとりあげ、在り方や活路について検討をはじめた。そのなかで、旧図書館の歴史的建造物としての重要性を明らかにし保存活用していく方針となり、平成13年（2001）国登録有形文化財に登録され、また同年に保存修復を目的とした学術調査が行なわれた。調査は当財団が受託し、京都大学工学部建築学科西澤研究室が行なった。傷んだ部分の修理のほかに、写真から当初の存在が明らかであるランタンの復原や耐震性を確保するための構造補強を提案している。



平成14年（2002）には水口町教育委員会の呼びかけに応じるかたちで、「旧水口図書館を活かす研究会」が発足し、建物の保存修理を前提とした活用についての意見交換がなされ、提言書として纏められた。前後して教育委員会では修理のための準備を進め、平成15年（2003）7月当財団に実施設計が委託された。実施設計は平成15年7月から開始し、完成した後直ちに一括請負工事の指名競争入札を行なった。結果、地元の株式会社フジサワ建設が落札し、平成15年9月から工事を着手し、翌年3月末に完了した。なお、事業の財源として滋賀県市町村振興総合補助金の交付を受けた。

## 旧水口図書館の概要

### 構造形式

鉄筋コンクリート造（壁レンガ造） 2階建て 一部塔屋付き 陸屋根

### 規 模

面積 建築面積52.2㎡ 延面積109.5㎡

高さ 道路側敷地立ち上がりから2階屋上パラペット上端までの高さ約8.3m

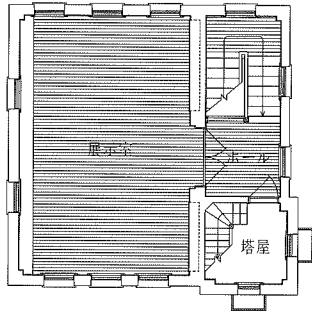
同所から塔屋パラペット上端までの高さ約10.2m

### 平 面

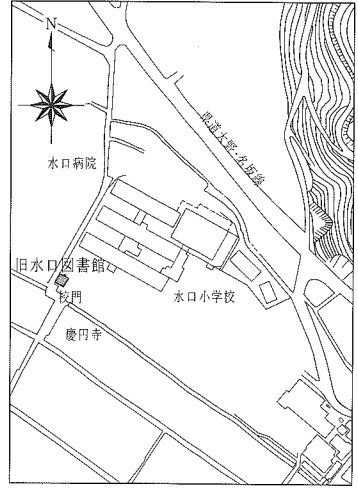
東を約39度南に振った方角を正面とし、平面は約7.15m角で、東北角側通りをL型に柱半分外に広げ塔屋部分を印象づけている。この部分東面に玄関があり、沓脱ぎから1段上は2.5畳大のホールで、右手脇に片開きの通用口が設けられていた。

1階は大きく2室に分かれ、東側の約10畳大の閲覧室は子供用図書室として計画され、玄関沓脱ぎとの境の壁には受付用の上げ下げ窓があり、この辺りに司書の席があったと思われる。西側は7.5畳大の書庫で、西面にスチール製の両開き窓が3ヶ所あり、窓のない三方の壁と中央部島型に書棚を造りつけていた。書棚は米松製で側板内側に均等に丸穴を穿ち、そこへ丸鋼を切ったものをダボにし棚板を載せた可動式で、質実剛健なヴォーリスらしさ<sup>13</sup>が見て取れ、当初のものではないかと思われる。玄関ホール正面右側は3級下がるモルタル塗りの階段で、踊り場下のスペースが片開き框戸で仕切られ、元は小遣い溜まりとして計画されたが倉庫になっていた。左側の木製階段をコの字に折れて2階に上がると、2.5畳大のホール（以後2階ホールとする）になっている。

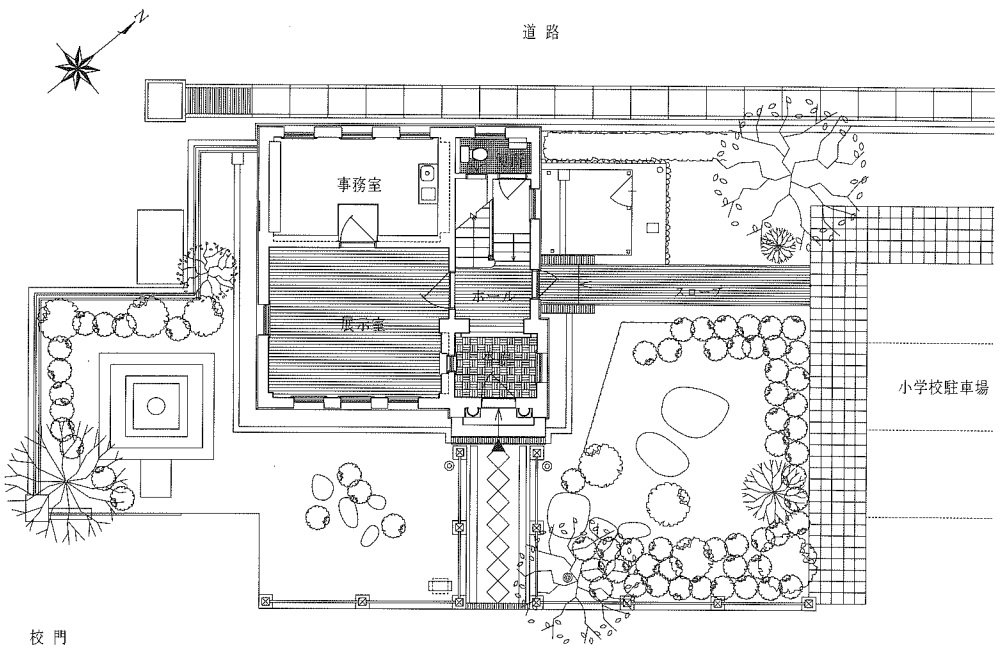
2階は17.5畳大1室で、社会人向けの閲覧室兼会議室として計画された。南面は一面に造りつけの木製ベンチがあり、北面の入り口両側には柱に挟まれた壁の窪みを利用して書棚が設えられていた。2階ホール東面の片開き戸の奥は塔屋で、南面の壁に沿って矩折れに狭



2階平面図



付近見取図



道路 校門



配置図・1階平面図

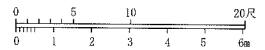


図-1 竣工 配置図兼各階平面図

い木製階段があり3階に至り、西面の片開き戸から屋上に入入りできるようになっていた。

注3 ヴォーリスは、自身の作品集序言でこう述べている。「・・・至極簡単なる普通の住宅をはじめ、条件の多い建物に至るまで、最小限度の経費を以って、最高の満足を与える建築物を人々に提供せんと一途に努力し・・・現在焦眉の急を要する日常生活の使用に對して、住み心地のよい、健康を護るによい、能率的建物を要求する熱心なる建築依頼者の需に應じて吾々はその意をよく汲む奉仕者となるべきである。」

## 外 観

屋根は陸屋根とし、2階建て一部塔屋付きで、パラペット頂部と屋上スラブ、1階腰の高さに蛇腹を廻し、足元に土台を形造っている。正面北寄りの玄関両側にはトスカナ式円柱を配し、上部の壁を窪めた楕型ペディメントには燭台と書物、ブックエンド、月桂樹を配したレリーフを造り出していた。窓は原則1、2階の上下同じ位置に配し、平面機能上窓を開けることが出来なかった南壁1階の西寄りには、あるべき位置の壁に同寸の窪みを拵え表現している。2階の窓は、窓台と上部を窪めた楕型ペディメントを設け、塔屋の窓には底部に持ち送りのある浅いバルコニー状の窓台をつけている。このように小規模ながらも細やかな気遣いが感じられ、好感が持てる建物である。

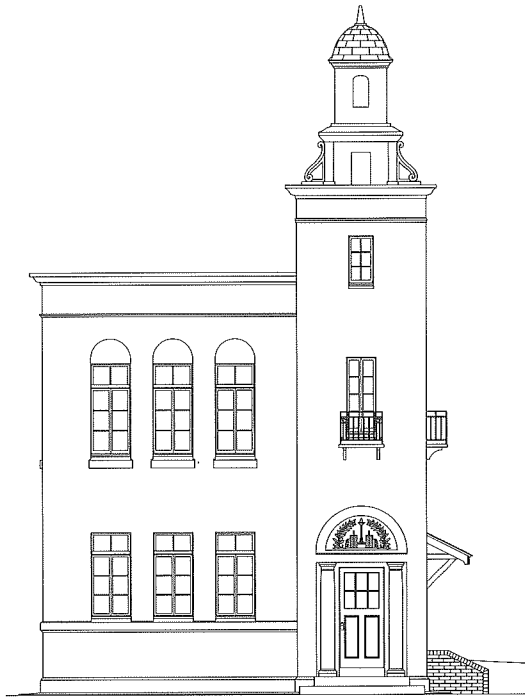


図-2 竣工東立面図

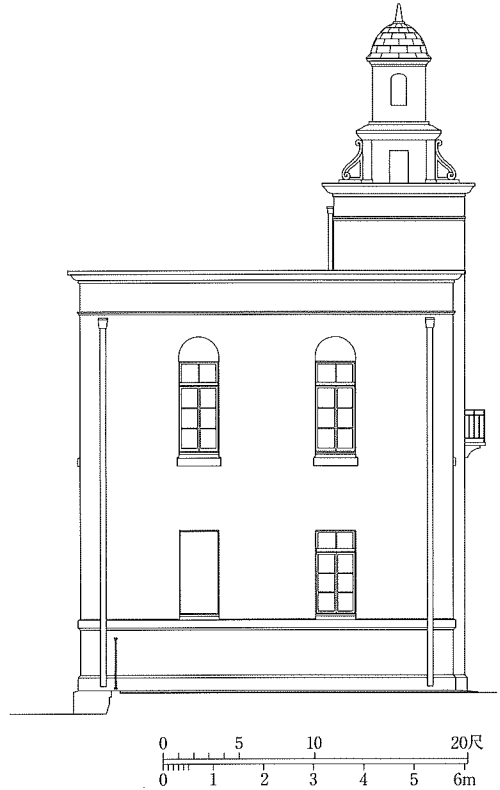


図-3 竣工南立面図

## 修理の方針

研究会の提言を基に水口町と打合せ、活用に向けた整備について方針を決定した。

## 基本方針

旧図書館の用途は、従来の教科書センターとしての機能のほかに、文化財としての公開など「旧水口図書館の活用の基本方針」に添った運営をすることになった。そのため傷んだ部分の補修だけでなく、一般の人々の利用を考えた改修が求められた。

- ① 老朽化し傷んだところや耐久性に問題がある部分を修理する。また文化財的価値を考え、間仕切りや仕上げ材は当初どおりとし、外装材やランタンなど失われた部分は復原する。
- ② 耐震性を確保するための構造補強を行なう。
- ③ 活用に必要な改修は、なるべく当初の意匠を壊さないように配慮し最小限に留める。

但し身障者用出入口として、北側通用口にスロープを設置した。既設の出入口の幅や階段などは、「高齢者、身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の建築の促進に関する法律」に定められた規格では、改造が大きくなり適わなかったが、登録文化財であることを考慮しながら、人的な補助というソフト面でのバックアップによって運営することになった。

## 各室の利活用

1階閲覧室は常設の展示室とし、巖谷小波と井上好三郎とヴォーリスの3氏を概説する場所として計画とした。書庫は、この建物を管理運営するための事務室として使用することになった。そのため書棚は南面を残し撤去し、腐朽していた材料以外は、玄関の下足箱に再利用したり補修のはぎ木などに活用している。

2階の閲覧室は、企画展示や小規模な集会など多目的用途に用いることになった。北壁面はピンワークができるようにし、上部にピクチャーレールと配線ダクトを埋込んでス

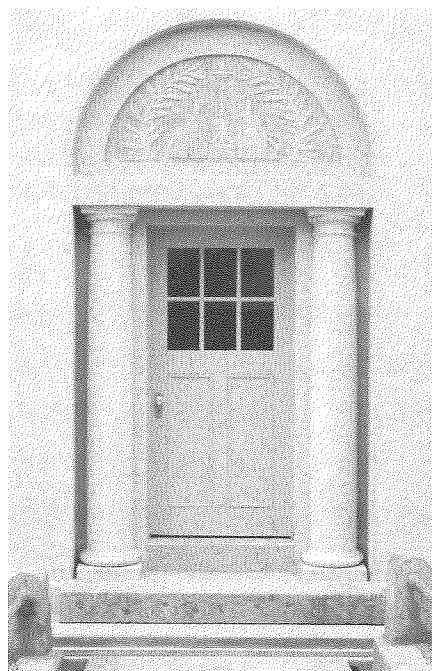


写真-2 正面玄関廻り

ポットライトを用意した。

塔屋は1、2階を活用するための機材置場として、例えば床に座ってのお話会が催される時は椅子や机を収納する倉庫となる。

## 修理の内容

### 外装及び外構

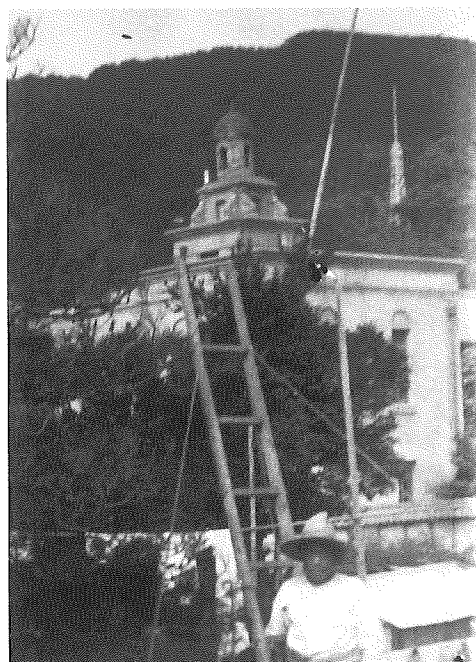
外壁は、補修で用いられた弾性吹き付け材を剥離し、打音調査で左官仕上げの浮いている部分を確認し、浮きの状態によって下地まで剥離か樹脂補修か現状維持か、場所毎の修理内容を決めていった。併せてクラック等も補修し、当初と同等の左官仕上げに復原することとし、入念に色合わせした。

ランタンは塔屋屋上に当初の固定用ボルト痕が残っていたのと、設計当初は1枚の写真（参考資料1）だけが頼りだった。屋根頂部に旗竿がついたもので、それに合わせた復原を予定していたが、工事中に竣工間もない頃の写真（参考資料2）が新たに見つかり、旗竿は国旗掲揚が必要な行事用で、当初はなかったことが判明し変更した。

屋上は防水を下地からやり替えた。解体後水勾配に配慮しながらレベル調整し、当初の



参考資料-1  
戦後の文化祭と思われる写真



参考資料-2  
昭和初期 図書館竣工間もない時期の写真

アスファルト防水の仕様では心許ないことと、活用の際しての断熱効果を考慮し、国土交通省アスファルト防水露出絶縁工法D-2仕様+DD断熱アルミコート仕上げとした。防水の立ち上がり部分はパラペットとの水仕舞いが悪く、鉄筋コンクリートで顎を新設している。塔屋屋上は、ランタンの足元廻りがあり形状が複雑でピースが小さいため、国土交通省ウレタン塗膜防水工法X-2工法仕様とした。

外構では正面の飛び石や縁石はレベルを据え直し、北面の犬走りは設備の都合上やり替えた。正面の石とパイプでできた柵は、参考資料の写真から後年のものと判ったが築山との関係もありそのまま残した。周辺の庭は、雑草や未生の木などを整備し樹木の剪定や石組みを直すなどして整えている。通用口の後設の流しは撤去し、西側を囲って設備ヤードを造り、空調室外機や換気排気筒や構内柱などを集中させた。

## 内 装

旧図書館は、往時の使用方法が土足であったか定かにはできなかったが、沓脱ぎスペースがあることや、今回の活用で童話の読み聞かせをする場合は床に直に座りたいなどの要望があったことから、靴を脱いで使用することにした。

主な内装の修理は上塗りを落とし、天井はコーニスを残し浮きやクラックの補修や2階は下地から修理した後復旧し、壁は塗装を剥離し浮きやクラックの補修後再塗装した。床板は解体後根太を修理し、腐朽した縁甲板を部分的に取り替えて復旧した。階段は、踏み板や手摺を解体し締め直している。

書庫は事務室に活用するため、床のモルタル塗りを長尺シートに変更した。北壁面は構造補強と設備用配管のスペースとして壁を蒸し、西寄りにミニキッチン<sup>ふか</sup>を設えた。

## 構造補強

阪神淡路大震災以降、耐震補強という言葉が一般化し要望されることが多くなりつつある。旧図書館では、平成13年（2001）度の調査でヴォーリス事務所の設計当初の構造図（著作権所有：株式会社一粒社ヴォーリス建築事務所 所蔵：大阪芸術大学）が明らかとなっていたが、実際の建物に照らし合わせてみると、図面に

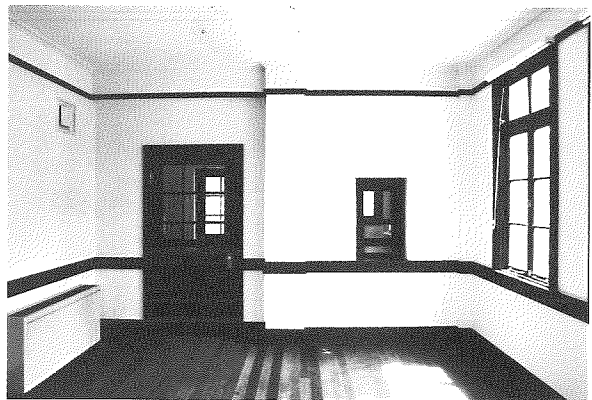


写真-3 1階展示室 北を見る  
右の小窓が玄関沓脱境の受付用窓



写真-4 2階塔屋内部 南西面を見る  
鉄骨の構造補強材が判る

あるフーチングがなく小梁の位置や本数が異なるなど、施工現場において変更があったと判断された。今回工事では、躯体の配筋や基礎など元の構造で判らないことが多いため、本体の文化財としてのオリジナリティを損ねず、基礎に大きな荷重がかからない程度に補強することを考えた。

具体的には、縦横鉄骨アングルを組んだフレームに3mmの鉄板を当てた補強材を、柱、梁、スラブにボルトで固定することにした。設置場所は、1階閲覧室と書庫の北壁面、書庫の東壁面、2階閲覧室の北壁面、塔屋2階西壁面である。

塔屋3階部分は、上部のランタンを鉄骨で復原するため鉛直荷重や曲げモーメントを考慮し、四隅と梁にプレートを当てて固める計画とした。補強に用いた鉄骨は全て

防錆塗装し、塔屋内部は鉄骨が直接見えるため合成樹脂調合ペイント仕上げとした。

2階へ上がる階段中央の筋壁はレンガ造で、その足元を設備配管貫通のために掘り下げたところ地中に基礎がなく、構造的に危険と判断し壁を鉄骨で挟みジャッキアップして鉄筋コンクリートの基礎を新設した。

## 設 備

設備器具や配管類は躯体をなるべく貫通せずかつ隠蔽させ、文化財の価値を損ねることがないように計画した。給水は今回新たに引き込み、排水は旧図書館用既設最終桁に合流している。

階段下に設けた便所は、床をタイル貼りに変更し排水口を設けて洗い流し式とし、洋式便器1台と手洗い器1台を新設した。

空調はヒートポンプ式マルチエアコンで、室外機を北側設備ヤードに据えた。換気は1階分をダクトで事務室に纏め、階段下物入れに機械を設置し床下を通して設備ヤードの排気筒に接続している。2階は塔屋を通じペントハウスより壁付きプロペラファンで排気した。

機械設備と同じく電路は躯体をなるべく貫通せず、隠蔽した。着工に先立ち、既設電路のうち再利用可能な配管を調査したが、全ての配管が途中で錆びたり潰れたりしており旧電線が引き出せず、新たに配管を設けることになった。

照明器具のうち当初のものと思われるのは1、2階ホールのシーリング灯計3台と書庫のペンダント灯2台だった。外灯は既存と同じ意匠を特注し、ほかは既製品から建物の雰囲気にあうものを選んでいく。特に1、2階の展示室は、ヴォーリスの設計図面の断面図に描かれた意匠の器具を探して設置した。事務室入口脇には、照明や空調のスイッチ類を集中管理できるよう整えた。

自動火災報知設備は、主だった室内は空気管を廻らせ、塔屋などには差動式スポット型感知器を取り付けた。受信機は事務室に置き、非常通報装置と連動させて役場と学校に通知するシステムにしている。

## 工事中判明したこと

### 基礎・軸部

構造補強と設備配管に伴う掘削で、部分的に基礎梁の存在を確認できた。場所は事務室北東面及び1階展示室の構造補強部分と北面外壁の西寄り部分で、地中梁成は500mm前後、厚みはレンガ壁より約120mm出しており総厚さ360mm前後と推定できた。事務室の土間天より地中梁天まで約380mmであった。

確認できた部分の基礎及び柱や梁は鉄筋コンクリートでラーメン構造とし、壁は下地が確認できた間仕切り壁も含めてレンガ積みであった。判明した部分の使用レンガサイズは、115～120mm×230～240mm×60mmで、パラベットの立ち上がり部分も梁上に直接レンガを積み、天端は無筋コンクリートで水勾配をとっていた。

1階事務室のスラブは厚み約100mmで、骨材の多い無筋のコンクリートだった。2階展示室北面の梁は、東側1スパン分だけが他より梁成を50mm低くしており、見掛けの統一のため木軸<sup>ふか</sup>で蒸していた。2階及び屋上スラブの厚みも約100mmであった。

### 屋上

前述したように昭和50年代半ばの補修で、本体、塔屋ともシート防水とし、パラベットの天端にアルミ笠木を設け防水層を納めていた。シート防水を解体したところ、2層のアスファルト防水層の下に厚み約25mmのモルタルの層があり、透明フィルムシートが1層、さらに下に厚み約3mm程度のモルタルの層が残っていた。



## 外 装

修理前の外装材は弾性吹き付け材であったが、剥離したところ砂壁が現れた。仕上げ層を確認したが、ヴォーリスの設計図面に明記されていたスタッコという仕上げと考えられる。骨材の砂は付近の野洲川で採取される、黒色の石粒を含んだものを用いていた。

犬走りは厚み約60mmの無筋コンクリートだった。正面の玄関に至る菱型の飛び石は、昭和4年（1929）の小学校卒業写真から当初からのものと判り、埋もれていた両脇の縁石も見つかった。

## 内 装

展示室やホールの床は、コンクリートスラブの上に約460mmピッチに幅40mm成30mmの転ばし根太をモルタルにて固定していた。仕上げは米マツ縁甲板を洋釘留めし、釘ピッチは約90mmだった。納まりにおいて変わっているのは、2階展示室出入口の沓摺りがないことで、通常であれば1階と同じように木製の沓摺りを設けるところが、扉を開けてホールと一体に使うことを強く望んでいたと思われ、当時においては斬新な手法と感じた。

1、2階の展示室とホールは、壁や天井、コーニス（廻り縁）とも漆喰塗りで、木製の幅木と腰長押が取り付け、さらに展示室窓枠上部は木製のモールディングが巡っていた。内部の主な壁は漆喰の上から水性塗料でクリーム色に着色していたが、裏方空間である事務室と塔屋は天井を漆喰塗りとし、壁はモルタル金鋺押えにしていた。漆喰壁の仕上げは、厚み15～20mmで下塗り1回に中塗り2回のうえ上塗りを厚み1.5mm程度とし、下地の材料は腰長押からはモルタル塗り、上は土塗りを使い分けしていた。書庫と塔屋のモルタル塗りの壁は厚み15mm程度で、下中塗りが各1回で上塗りの厚みが2mmである。

階段踏み板の裏は吸い付き棧を打って根太とし、コンクリート躯体に固定していた。この吸い付き棧の隙間には<sup>もみから</sup><sub>たが</sub>が詰め  
てあり、吸音効果を考えたものと思  
われる。

## 建 具

各出入口の建具は木製腰付き框硝子戸で、1階展示室と事務室境の1箇所は鉄扉、屋上出入口はアルミサッシだが、脇に当初の木製腰付き框硝子戸が外して保管してあり、復原に

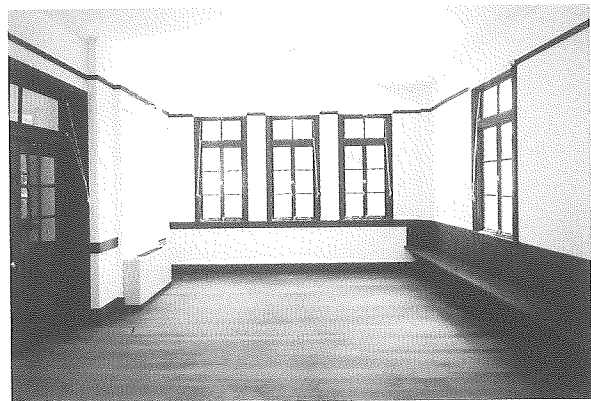


写真-5 2階展示室 東方向を見る

役立った。窓は事務室のスチール製以外は木製の両開き及び片開きの框ガラス窓で、欄間は横軸回転框ガラス窓であった。木製建具のいくつかは框の仕口が緩み、L型やT型の金物で補強していた。仕上げは内部がオイルステイン、外部が合成樹脂調合ペイント仕上げで、修理前は赤茶色に塗装されていたが剥離作業中に下から青磁色の塗膜が現れ、復原の根拠となった。両開き窓についていた滑り出しの開閉金物は、珍しい機構のもので、スチールに亜鉛鍍金され刻印からアメリカ製と判ったが、残念ながら傷みが著しく再用することが出来ず、同じ機構の既製品がないため取り外して保存している。

おわりに

冬期をはさんだ厳しい工期と限られた予算のなかで、資料も少なく解体してみなければ判らないことの多い大変な現場でしたが、水口町（当時）関係各位のご協力と工事関係者の努力によって、無事完成できましたことを心から感謝いたします。

なお、参考資料1・2は甲賀市教育委員会文化財保護課のご協力を得ました。口絵3・4の写真と写真2・4・5は、うかい写真スタジオが撮影したものを使用しました。併せて御礼申し上げます。

参考文献 滋賀県の近代化遺産 平成12年 滋賀県教育委員会発刊  
水口町誌 上巻  
水口小学校百年誌  
滋賀の図書館 歴史と現状 著者兼発行者 平田守衛  
建築にみるヴォーリスと近江八幡 編集発行ヴォーリス顕彰事業実行委員会

## 研究報告 平成16年度

| 件 | 名  |
|---|--|
|   | CM方式の市場性の研究調査                                |
|   | 住宅における電気・熱エネルギー消費分析研究                        |
|   | 住宅内のエネルギー消費に関する調査研究                          |
|   | 地震火災から木造文化都市の京都をまもるための環境防災の水利整備計画の立案に関する調査研究 |
|   | 大空間タイプのLDKにおける温熱環境の評価研究                      |
|   | 建築材料の防虫性能に関する調査                              |
|   | 建築物の熱環境と空調設備に関する解析技術の研究                      |
|   | 建築生産活動における品質確保のコントロールのあり方に関する調査              |
|   | 新防蟻剤の開発研究                                    |
|   | 木炭塗料の防蟻性に関する研究                               |
|   | 木製都市の設計技術に関する研究                              |
|   | 木質材料の耐久性評価に関する研究                             |
|   | 木質構造部材の燃え止まり解析方法の研究                          |
|   | 木造家屋（特に重要文化財）の腐朽及び蟻害の調査並びにその防止策の研究           |
|   | 空調システムの不具合検知に関する研究                           |
|   | 空調運転方式の最適化による睡眠環境創造の評価研究                     |
|   | 街づくりにおけるマネジメントに関する調査研究                       |
|   | 赤れんが倉庫保存活用事業                                 |
|   | 赤れんが博物館構造補強の検討                               |
|   | 都市における全天候型歩行者空間の設計に関する研究調査                   |
|   | 鐘楼の耐震性能評価に関する研究                              |
|   | 防腐効力試験                                       |
|   | 防蟻性能試験                                       |

## 事業報告 平成16年度

### 1. 文化財建造物に関する工事等（完了）

| 建造物名                | 所在地     | 委託者                 | 工事期間            | 備考              |
|---------------------|---------|---------------------|-----------------|-----------------|
| 平安神宮 大鳥居            | 京都市左京区  | (宗) 平安神宮            | 15.12～<br>16.12 | 登録文化財<br>修理工事   |
| 平安神宮<br>大極殿基壇・高欄    | 京都市左京区  | (宗) 平安神宮            | 16.4～<br>16.10  | 市指定<br>修理工事     |
| 三木家住宅<br>主屋・長屋・長屋門  | 兵庫県姫路市  | 姫路市                 | 16.4～<br>17.3   | 県指定<br>解体修理工事   |
| 藤森神社 拝殿             | 京都市伏見区  | (宗) 藤森神社            | 16.5～<br>17.3   | 未指定<br>修理工事     |
| 光明寺 御廟・御廟<br>拝殿・御廟門 | 京都府長岡京市 | 総本山光明寺              | 16.5～<br>17.3   | 市指定<br>修理工事     |
| 同志社<br>クラーク記念館      | 京都市上京区  | (学) 同志社             | 16.5～<br>17.3   | 重文<br>修理工事      |
| 同志社<br>クラーク記念館      | 京都市上京区  | 京都府                 | 16.7～<br>16.9   | 重文<br>修理工事構造診断  |
| 和歌山城<br>御橋廊下        | 和歌山市    | (財) 和歌山県文化<br>財センター | 16.7～<br>17.3   | 史跡<br>復元工事・構造診断 |
| 酒見寺 多宝塔             | 兵庫県加西市  | (宗) 酒見寺             | 17.2～<br>17.3   | 重文<br>修理工事      |

### 2. 文化財建造物に関する工事等（継続）

| 建造物名      | 所在地    | 委託者        | 工事期間            | 備考            |
|-----------|--------|------------|-----------------|---------------|
| 酒見寺 鐘楼    | 兵庫県加西市 | (宗) 酒見寺    | 14.10～<br>17.9  | 県指定<br>修理工事   |
| 平安神宮 南歩廊  | 京都市左京区 | (宗) 平安神宮   | 15.12～<br>17.10 | 登録文化財<br>修理工事 |
| 旧山邑家住宅    | 兵庫県芦屋市 | (株) 淀川製鋼所  | 16.2～<br>18.3   | 重文<br>修理工事    |
| 京都御所 諸太夫間 | 京都市上京区 | (株) 安井空工務店 | 16.8～<br>17.7   | 調査工事          |
| 毘沙門堂 本堂   | 京都市山科区 | (宗) 毘沙門堂   | 16.10～<br>17.12 | 市指定<br>修理工事   |
| 吉田神社 本殿   | 京都市左京区 | (宗) 吉田神社   | 17.1～<br>17.12  | 未指定<br>修理工事   |
| 鹿苑寺 方丈    | 京都市北区  | (宗) 鹿苑寺    | 17.4～<br>17.9   | 未指定<br>修理工事   |

### 3. 文化財建造物防災事業（完了）

| 建造物名        | 所在地        | 委託者          | 工事期間           | 備考              |
|-------------|------------|--------------|----------------|-----------------|
| 旧伊庭家住宅      | 滋賀県大津市     | 住友林業(株)      | 15.7～<br>17.3  | 重文<br>総合防災      |
| 叡福寺 多宝塔・聖霊殿 | 大阪府南河内郡太子町 | (宗) 叡福寺      | 15.11～<br>17.3 | 重文<br>消火設備      |
| 北野天満宮 本殿他   | 京都市上京区     | (宗) 北野天満宮    | 16.4～<br>16.9  | 国宝<br>総合防災      |
| 西大寺 美術工芸品   | 奈良県奈良市     | (宗) 西大寺      | 16.7～<br>17.3  | 重文<br>総合防災      |
| 藤森神社 本殿     | 京都市伏見区     | (宗) 藤森神社     | 16.9～<br>16.12 | 市指定<br>総合防災     |
| 叡福寺 鐘楼      | 大阪府南河内郡    | (宗) 叡福寺      | 16.10～<br>17.3 | 府指定<br>自動火災報知設備 |
| 烏帽子形八幡神社 本殿 | 大阪府河内長野市   | (宗) 烏帽子形八幡神社 | 16.11～<br>17.3 | 重文<br>総合防災      |

### 4. 文化財建造物防災事業（継続）

| 建造物名 | 所在地   | 委託者     | 工事期間           | 備考         |
|------|-------|---------|----------------|------------|
| 真珠庵  | 京都市北区 | (宗) 真珠庵 | 16.9～<br>17.12 | 重文<br>総合防災 |

### 5. 社寺等日本建築（完了）

| 建造物名     | 所在地        | 委託者      | 工事期間           | 備考          |
|----------|------------|----------|----------------|-------------|
| 興福寺 中金堂  | 奈良県奈良市     | (宗) 興福寺  | 16.4～<br>17.3  | 構造計画        |
| 西尾家住宅    | 大阪府吹田市     | 吹田市      | 16.12～<br>17.3 | 総合防災        |
| 圓乗院 客殿   | 岡山県倉敷市     | (宗) 圓乗院  | 16.7～<br>16.12 | 修理設計        |
| 白山神社     | 京都府京田辺市    | (宗) 白山神社 | 15.9～<br>16.10 | 環境保全        |
| 寂光院      | 京都市左京区     | (宗) 寂光院  | 16.9～<br>16.10 | 総合防災        |
| 隣華院      | 京都市右京区     | (宗) 隣華院  | 15.4～<br>17.3  | 総合防災        |
| 安楽壽院 収蔵庫 | 京都市伏見区     | (宗) 安楽壽院 | 15.10～<br>17.3 | 新築工事        |
| 慈照寺      | 京都市左京区     | (宗) 慈照寺  | 15.11～<br>16.5 | 新築工事（第一期工事） |
| 道成寺 念仏堂  | 和歌山県日高郡川辺町 | (宗) 道成寺  | 15.6～<br>17.3  | 新築工事        |
| 大覚寺 御霊殿  | 京都市右京区     | (宗) 大覚寺  | 14.8～<br>16.7  | 修理工事        |

6. 社寺等日本建築（継続）

| 建 造 物 名     | 所 在 地  | 委 託 者       | 工 事 期 間         | 備 考         |
|-------------|--------|-------------|-----------------|-------------|
| 寂光院 本堂      | 京都市左京区 | (宗) 寂光院     | 13.10～<br>17.6  | 新築工事        |
| 新勝寺 総門      | 千葉県成田市 | 大本山成田山新勝寺   | 14.6～<br>19.11  | 新築工事        |
| 妙心寺 涅槃堂     | 京都市右京区 | (宗) 妙心寺     | 14.10～<br>17.12 | 修理工事        |
| 藤森神社        | 京都市伏見区 | (宗) 藤森神社    | 14.11～<br>17.9  | 境内整備        |
| 慈照寺         | 京都市左京区 | (宗) 慈照寺     | 16.6～<br>18.3   | 新築工事（第二期工事） |
| 妙心寺 涅槃堂西土塀  | 京都市右京区 | (宗) 妙心寺     | 16.8～<br>17.5   | 修理工事        |
| 相国寺 収蔵庫     | 京都市上京区 | (株) 環境建築研究所 | 16.10～<br>18.1  | 新築工事        |
| 藤森神社 神楽殿    | 京都市伏見区 | (宗) 藤森神社    | 17.1～<br>17.9   | 新築工事        |
| 吉田神社 本宮・祝詞殿 | 京都市左京区 | (宗) 吉田神社    | 17.2～<br>17.12  | 新築工事・修理工事   |
| 三千院 収蔵庫     | 京都市左京区 | (宗) 三千院     | 17.2～<br>18.12  | 新築工事        |
| 妙心寺 涅槃堂東土塀  | 京都市右京区 | (宗) 妙心寺     | 17.3～<br>17.11  | 修理工事        |

7. 調査工事・耐震診断・建物耐震性能評価等（完了）

| 建 造 物 名 | 所 在 地   | 委 託 者   | 工 事 期 間        | 備 考  |
|---------|---------|---------|----------------|------|
| 圓乗院 客殿  | 岡山県倉敷市  | (宗) 圓乗院 | 16.7～<br>16.12 | 耐震診断 |
| 福勝寺     | 和歌山県海草郡 | (宗) 福勝寺 | 17.3～<br>17.3  | 構造診断 |

## 編集後記

平成17年（2005年）6月

会誌第9号をお送りいたします。

巻頭言は現評議員で京都大学副学長・名誉教授・理事（財務、情報基盤担当）の辻文三先生にお願いした。新しく法人化された京都大学では、任命された京都大学理事・副学長の1人として、その運営にあたり活動されている。

報告の第一は平安神宮神苑の建築（尚美館・泰平閣）の檜皮葺きの修理等と大鳥居の修理工事である。前者は昭和50年（1975）に指定された名勝平安神宮神苑内にあり、後者の大鳥居は、昭和3年（1928）京都帝国大学武田五一教授が工事顧問、阪谷良之進技師が設計並びに工事監督、京都帝国大学坂静雄助教授による構造設計で、わが国では初期の鉄筋コンクリート造の鳥居として、平成14年（2002）8月に国登録有形文化財に登録されている。

報告の第二はヴォーリス建築事務所が昭和3年（1928）に設計し、平成13年（2001）国登録有形文化財に登録された、旧水口図書館の保存修理工事である。同年、保存修復を目的とした基本調査研究を当財団が受託し、京都大学建築学科西澤研究室が担当して、構造補強を含めた提案を行ない、2年後受託した実施設計と工事監理は日本建築研究室が担当した。本稿は、その実施設計と工事監理について報告したものである。

（松浦邦男）

建築研究協会誌 第9号

平成17年（2005年）6月30日

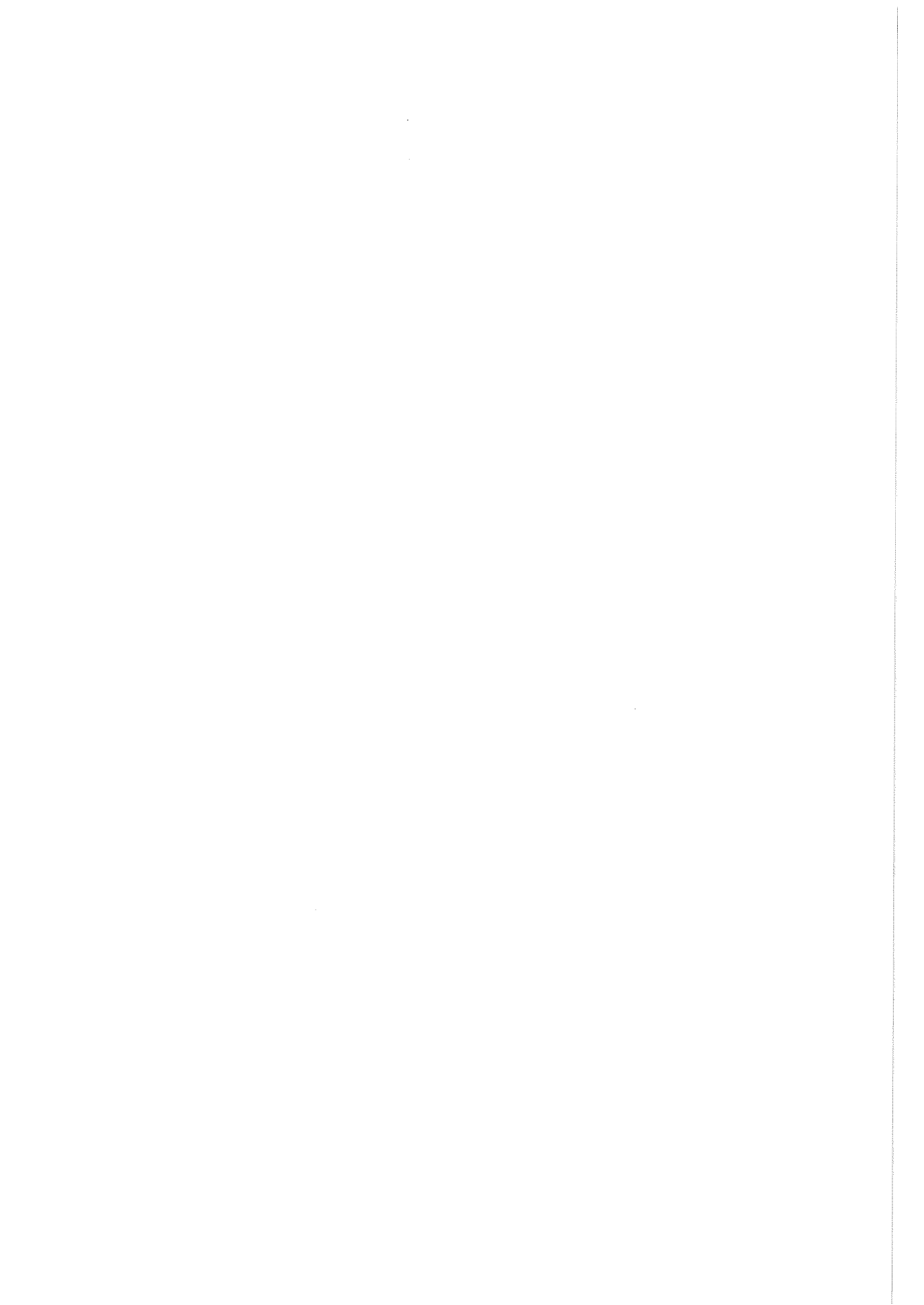
発行 財団法人 建築研究協会

〒606-8203 京都市左京区田中関田町43

電話 075-761-5355

FAX 075-751-7041

印刷 株式会社 便利堂





Architectural Research Association

9

2005 · 6